

令和4年度第3回大府市有識者懇話会 要点記録

日時：令和4年7月28日（木）

午後2時～4時

場所：委員会室1

出席委員（敬称略・五十音順）

委員 井上 さつき（オンライン）

委員 小川 容子（オンライン）

委員 近藤 薫

ファシリテーター（敬称略）

池田 哲也

大府市

市長 岡村 秀人

副市長 山内 健次

副市長 山田 祥文

教育長 宮島 年夫

企画政策部長 新美 光良

市民協働部長 信田 光隆

健康未来部長 中村 浩

産業振興部長 寺島 晴彦

教育部長 浅田 岩男

文化交流課長 田中 雅史

子ども未来課長 間瀬 恵

商工労政課長 半田 貴之

学校教育課長 大山 容加

法務財政課財政係長 橋本 有司

（事務局）

企画広報課長 太田 雅之

企画広報課広報広聴係長 福田 隆広

企画広報課広報広聴係主任 樋口 大樹

テーマ

バイオリンの里構想の推進について

1 市長あいさつ

2 市政提案

【鈴木政吉氏の来歴からバイオリンの里構想を提言】

- ・ 日本のバイオリン王と言われる鈴木政吉氏は 1890 年の「第 3 回内国勸業博覧会」で 3 等賞を受賞。早くから海外に目を向け、日英博覧会に出展し、大賞を受賞した。
- ・ 第 1 次世界大戦の影響で、バイオリンの主な輸出国であったドイツでの生産が止まったので、鈴木バイオリン製造に受注が集まった。1920 年には、11 万 2,000 本の楽器を作った。当時、鈴木バイオリン製造では、1,000 人を超える従業員が働いていた。
- ・ 鈴木政吉氏は、量産品としてのバイオリン製作から、高級な手作りのバイオリン製作に取り組むようになっていく。鈴木政吉氏の特徴は、バイオリン工場の経営者と楽器職人であり続けたことである。
- ・ 鈴木バイオリンは、ドイツの楽器生産地マルクノイキルヘンにならって、大府をバイオリンの里にすることを目指していた。マルクノイキルヘンには数多くの楽器職人がおり、現在でも楽器博物館や楽器製造の学校もあり、音楽コンクールも行われている。
- ・ 竹澤恭子さんが 3 年に 1 回、学校訪問コンサートをしていると聞き、生のバイオリン演奏を続けていることがとても良い取組だと思っている。
- ・ 水野紗季さんが市内の小学校で訪問コンサートを始めると聞き、素晴らしいと思った。また、北山小学校の児童を対象にバイオリンの授業をしたことは素晴らしいアイデアだと思った。
- ・ 実は 90 年前、鈴木政吉氏は小学校の授業でバイオリンを弾かせたいと思い、1930 年に白壁小学校（名古屋市）などで課外教育としてバイオリンの授業が行われていた。課外授業の団体用にバイオリンも作っていた。
- ・ 授業を通して、興味を持った子どもが次のステップに進める環境があるといい。
- ・ バイオリンを通して関係する市と連携を探ると良い。松本市の他、浜松市、マルクノイキルヘンとの連携を検討してみてはどうか。様々な展示会や弦楽器コンクールなどの開催も検討してみてはどうか。
- ・ 市内の小学校で 4 年生全員がバイオリンを体験できることはとても素晴らしいので、来年度是非実施してほしい。

【音楽教育学の立場からバイオリンの里構想を提言】

- ・ 日本人は、鎖国が解かれてから、1番最初に太鼓・ラッパに出会った。それから、明治政府は様々な教育改革を行い、音楽教育を実施するための指導者養成として、音楽取調掛ができた。
- ・ 明治11年、宮内省式部寮雅楽課の伶人たちが、管弦楽の研究を行うエツケルトやオランダの演奏家ソーヴェレーにバイオリンを習い始める。
- ・ 昭和43年～45年、学習指導要領が改訂され、歌唱・器楽・創作・鑑賞に「基礎」が加わった。平成29年～30年には、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの学習課程の改善」が加わった。「主体的・対話的」という点に関しては、全国的に様々な試みがなされているが、「深い学び」という点に関してもう少し丁寧に深堀をする必要があると考える。
- ・ 大府市のバイオリンの里構想という素敵な構想が持ち上がっていると思うが、北山小学校でのバイオリンの授業はモデル校としての全国に発信してはどうか。ゲストティーチャーを招いたり、子どもたちによる演奏会を開催したりするなど、児童の演奏技術の向上を目指してはどうか。また、バイオリンづくりの現場の見学するなどして、地域への興味や誇りの創出を目指してはどうか。
- ・ ICTを活用して、子どもたちの興味を引き、技術の向上につながるコンテンツを用意してはどうか。
- ・ 全市民が社会の音に敏感になって、音や音楽と豊かに関わる環境を整えることで、耳の肥えた聴衆層を厚くすると良い。
- ・ 市民が生活のあらゆる場面に満ちている音と音楽に積極的に関わる土壌が必要。例えば、市役所内で流す音楽、商店街で流す音楽、横断歩道の音楽、美しいバイオリンの音色を活用するなど。また、学生が課題の中で、音環境マップを制作するという事例がある。どこでどんな音が聞こえたのか、時間帯によって変わるのか、季節によって変わるのかなど。学生が耳を研ぎ澄ませながら、身の回りの音を注意深く聴くようになる。
- ・ 市民が楽しむという視点として、アマチュアオーケストラやおぶちゃんとバイオリンを弾こう大会など、開催してみてもどうか。
- ・ 北山小学校でのバイオリンの授業は大変素晴らしい。90分の授業で「きらきら星」が弾けるようになったとのことだが、授業を通して自分だけの課題を見つけて、子どもたちが課題解決に向け、挑戦してほしい。これは教育のディープリングにあたるが、「もっとかっこよく演奏したい」、「騒音と音楽との境界はどこか」など、多様な解のある問題へ挑戦してほしい。

【演奏者や先端アートデザインの立場からバイオリンの里構想を提言】

- ・ 芸術はすべて自然に根差しており、あらゆる芸術家が自然からインスピレーションを得ている。それをデザインしていくのがまちづくりであり、企業であると思う。それがソサエティーを作っていく。
- ・ 政府は、従来の STEM 教育に A（アート）を加えた STEAM 教育を推進している。
- ・ バイオリンの里構想の推進に当たって、樹を育てることと、職人を育てることの2点が重要だと考える。
- ・ 楽器の材料となる木は、樹齢 200 年程にならないと楽器の材料として使えない。そこからさらに 30 年かけて乾燥させる必要がある。そのため、今植えた木が楽器になるには、230 年後になる。短期間で成果を求められるまちづくりなどで 230 年先を考えることは難しいかと思うが、楽器とはそういった長い時間をかけて作られるものである。
- ・ 材料から楽器を作る「楽器製作者」及び楽器を修復する「楽器修復士」は世界的な人材不足である。イタリアのクレモナに国際バイオリン職人専門学校があるように、人材の確保が必要である。
- ・ 効率優先のまちづくりでは価値観が集約されてしまうと思う。本来芸術には正解というものがない。効率だけを追求しない未来都市として、多様な価値観のある、芸術的な感性が根底にあるまちづくりが必要である。
- ・ 230 年先を考え、他にはないサステイナブルなまちづくりが必要である。バイオリンというような長い時間をかけて作られるものを大切にしているという姿勢が大事ではないか。
- ・ 芸術的な感性を製品に生かしていくなど、産業とのクロスポイントとして、世界の目標になるまちづくりが必要である。まずは成功するモデルケースを作っていきたい。
- ・ ものづくりのまちである大府市のバイオリンの里、文化のまちである長久手市の文化芸術マスタープラン、刈谷市の刈谷国際音楽コンクールと連携し、多くの人を巻き込みながら芸術環境を作り上げてみてはどうか。

3 意見交換

- ・ 今年度初めて北山小学校でバイオリンの授業を始めた。バイオリンは、敷居が高くて、高級品というイメージがある。子どもは、授業を通じて、保育園児は、バイオリンの演奏を聴いてもらうことでバイオリンに親しむことができる環境を作りたい。また、身近でバイオリンの音色が聴けるようなまちづくりを進めたい。
- ・ 市制 50 周年記念として、市出身の水野紗希さんに大府市公式イメージ曲

を作曲していただいた。バイオリン学習の先進地として、岐阜県恵那市を視察したところ、地域の方が授業の応援として音楽学習と一緒に取り組まれていた。

- 利用者の視点、一般市民の視点、制作者の視点で、バイオリンを考えないといけないと思っている。愛知県はものづくりのまちなので、楽器作りについても何かできないかと思っている。
- 大府市だけで完結することはできないので、特色のある市町と連携し、広域的にも考えていきたい。
- 子どもへの教育として、古代ローマでも身体づくりとこころづくりとして体育と音楽から行っていた。子どもたちには、バイオリンという難しい楽器に実際に触れてもらい、演奏に挑戦してもらうことで、木との一体感や、木が切り出される前に200年経っていることなどを体感してほしい。
- バイオリンの本物の音を直接聴く機会を設けることも必要である。コロナ禍においてオンライン演奏会などを開催したが、どうしても欠落しているものがあつた。
- バイオリンは、簡単には音がでないような難しい楽器だからこそ、さらなる挑戦や深掘りにつながると思う。
- 小学校でのバイオリン体験は非常に驚いた。小学校という学習指導要領に沿ったカリキュラムがある中で、音楽の授業の中でバイオリン学習ができるよう調整されて、とても素晴らしい。もっと、これをモデルケースとして、全国にPRをしてほしい。
- バイオリンを通じて、地域の人たちとも共有して、音楽教育だけでなく、地域の活性化にもつなげてほしい。広報おおぶ令和4年8月号の市長の一言に掲載されている「日本のバイオリン作りの文化を残したい」という言葉が心に響いた。日本のバイオリン製造はかなり厳しい現実がある。大量生産では中国にはかなわない。バイオリンの伝統を如何に支えるのかが大事である。
- 子どもへのバイオリンの授業は、危ない側面もあると感じている。バイオリンを子どもに教えていると、向き不向きがあることがわかる。バイオリンの演奏は努力が成果につながりにくいもので、より劣等感を生む可能性がある。評価はどうなっているのか気がかりでもある。
- 90分の授業で何か評価が出るというものではなく、とりあえず触ってみることから始まる。実際に楽器に触れるだけでも多くの経験となる。その上で、もっとバイオリンを演奏したいと思う子の受け皿があるといい。
- 人間は「テクノロジーを活用して便利にしていく人」と「多少不便でもいいから人間らしい生活がしたい人」に分かれると思う。この2つの価値観

がバランスよく存在できている必要がある。また、一人ひとりが100年先のことを考えた行動がとれるような、芸術的な感性を持つ人が住むまちを目指すというのでないか。

- ・ 今年度、すべての市内公立保育園でも演奏会があると聞いている。この取り組みも意欲的で素晴らしい。市内の幼稚園は対象ではないのか。日本のバイオリン作りの文化を残すということを頭の片隅においてほしい。
- ・ 市内には公立の幼稚園がない。しかし、公立も私立も含めて、バイオリンに親しむ環境があるといいと思う。
- ・ 来年度は、市内の9つの小学校の全てでバイオリン授業を実施すると聞いている。今年度に取り組んだ北山小学校とは違う方法で実施してもいいと思う。それぞれ違う方法で実施して、その報告会があるといい。バイオリンを通して、子どもたちの目がキラキラした将来が見えてくると思う。
- ・ 2014年に浜松市は、ユネスコの創造都市ネットワークの音楽分野にアジアで初めて加盟した。大府市も加盟に向けて、プロモーションしてもいいと思う。
- ・ 広域連携を視野に入れ、愛知県が芸術で輝いているまちになるといい。
- ・ 鈴木バイオリンと大府市は不思議な縁を感じている。かつて大府で作られた鈴木政吉氏の胸像が回りまわって大府市に帰ってきている。バイオリンの文化を少しでも広めて、残していけるよう、今後も取り組みたい。